

〔研究ノート〕

カール・ヒムリーとその知られざる業績

——ヨーロッパで初めて将棋史を論じた男——

細川裕史

「中国では、中国のチェスと同様に日本のものもとても頻繁にプレイしましたし、いまでも両国の盤駒を持っているだけでなく、多くの棋書や現地の人々によるこのゲームについてのコメントも集めてきました」(Himly 1877: 155)

I はじめに

将棋の大内延介九段が1986年に著した『将棋の来た道』は、彼がアジア各地を旅し、現地の人々とその土地々々の将棋系ゲームをつうじて交流をしながら、インド発祥とされるこれらのゲームがどのような道をとって日本にやってきたのかを考察していくという、稀有な旅行記である。将棋の伝来に関しては、唐や宋に渡った貴族や僧侶によって伝えられたとする江戸時代以来の伝承にたいし、東南アジアにおける将棋系ゲームと将棋との類似性を強調した点、とりわけ将棋を深く知っているプロ棋士である大内九段が対局をつうじてその類似性を体感している点に特色がある。いくつもの旅の末に、彼は「インド→インドシナ半島→中国江南の港町→日本、私はこれが将棋の来た道だと確信する」(大内1998: 267)と結論づけている。

私が「将棋の来た道」に関心をもったきっかけは、日独関係の歴史を扱う講義の一環としてお雇い外国人について調べたことであった。その調査のなかで、ドイツ語圏に囲碁将棋をつたえた19世紀のドイツ人たちを知り、さらには、中国学者であり通訳官であったカール・ヒムリー (Karl Himly, 1836-1904)に出会った¹⁾。この人物こそが、象棋(中国将棋)の歴史を考察する傍らにはあるが、「将棋の来た道」を論じた最初のヨーロッパ人である。とりわけ興味深いのは、1870年代においてすでに、ヒムリー

が古代中国の象棋と日本の将棋の共通性を挙げ一般的な中国伝来説を紹介する一方で、将棋とマックルック(タイ将棋)との類似性にも注目し、史料が不足していることから断言は避けているものの、東南アジア経由で将棋が伝来した可能性を指摘している点である。これは、上述の大内九段と同様の意見であり、その一方で、最新の将棋史研究であり考古学的・文献学的視点からもっとも説得力があると思われる清水(2017)で明確に否定されている説でもある²⁾。しかし、ヒムリーの業績は、H. J. R. マレー (Harold James Ruthven Murray, 1868-1955)の著作をつうじて間接的に触れられるケースを除けば、日本ではほぼ知られていない。

ヒムリーの将棋に関する考察については、細川(2020)で触れたが、その執筆時には未見だったヒムリーの遺作『満州語事典 遊戯 (Die Abteilung der Spiele im "Spiegel der Mandschu-Sprache")』³⁾が、ドイツの東洋学者オリファー・コルフの手によって編集され、2019年に刊行された。コルフは、同書において、ヒムリーの経歴や研究業績を整理している。そこで、本稿では、この新資料も含めて、改めてヒムリーの将棋史観を考察していく。以降、煩雑さを避けるため、直接引用部以外では、ヒムリーが「日本のチェス (japanisches Schach)」と呼んでいるゲーム(現行の日本将棋とその原型および変種)を一貫して「将棋」、ヒムリーが「シアン・チー (hsiang ch'i)」や「中国のチェ

ス (chinesisches Schach) 」と呼んでいるゲーム (現行の中国将棋とその原型および変種) を「象棋」, 「シャムのチェス (siamesisches Schach) 」と呼んでいるゲームを「マックルック」と呼び、古代インドのチャトランガから派生したそれらのゲームの総称としては「将棋系ゲーム」を用いる。また、象棋の駒に関しては、引用など特別な場合を除き、中村 (2022) における黒方の名称のみを用いる。

II カール・ヒムリーとその業績

1. 略歴

ヒムリーの人生については、あまり多くのことは知られていない。それは、彼が、70年に満たない人生の約半分を健康上の理由から定職のない年金生活者として過ごしており、公的な活動としては研究論文を発表するだけであり、Linde (1874) や Marray (1913) のような専門書を著していないからである。以下に、Walravens (1984) および Corff (2019a, 2019b) に基づいて彼の生涯を概観する⁴⁾。

カール・ヒムリーこと、カール・フリードリヒ・ゲオルク・ユリウス・ヒムリー (Carl Friedrich Georg Julius Himly) は、1836年、ハノーファーに軍医の息子として生まれた。ゲッティンゲン大学およびベルリン大学で文献学を学び、1861年に教員試験に合格している。その間、1860年にドイツ東洋学会 (Deutsche Morgenländische Gesellschaft) に入会しており、生涯にわたって同学会の論集をつうじて研究成果を発表していくことになる。なお、ヒムリーの知人であったフランスの中国学者アンリ・コルディエ (Henri Cordier, 1849-1925) による追悼文では、ゲッティンゲン大学を卒業後にベルリン大学で東洋の諸言語を身につけた、となっている。

大学卒業後の数年間、ポーランドおよびロシアで家庭教師として生活したのち、1865年夏にプロイセンの通訳官候補生として北京に赴任し、1867年以降は上海のプロイセン王国領事館

で活動した。上述の追悼文によれば、上海では1870年までイギリス王立アジア協会の司書も務めており、そこでコルディエと知り合っている。その後、1871年6月から1872年9月までの長い休暇をはさみ、同年11月に通訳官に昇進している。通訳官としての職務は、健康を害して1876年夏に帰国するまで続けた。ヒムリー自身の証言によれば、この中国滞在中に、彼は象棋だけでなく将棋にも出会い、現地の人々と頻繁にプレイしていた⁵⁾。帰国時は、香港、ロンドンを経由してドイツに至ったのだが、その途中、治療のためにシンガポールに滞在しなければならないほど健康状態は悪かった。そして、1877年6月には退官している。ただし、中国滞在中の経歴には異説もあり、所属するドイツ東洋学会の会員名簿では1867年度までドイツ在住となっており、1868年度に「広東プロイセン王国領事館所属」、1869年度によく「上海プロイセン王国領事館所属」となっている。

退官後はまずハルバーシュタットに居をかまえ、その後、母親が他界したのを機に、1891年、保養地として有名なヴィースバーデンに移っている。引退時、まだ40過ぎだったヒムリーは、わずかな年金を補うために、病を押して、東洋の言語や文化、歴史に関する豊富な知識を生かし、翻訳など他の研究者の手伝いをして暮らした。しかし、肺炎で死ぬ直前には、月150マルクの年金以外には収入も財産もなかったため、彼のために年金額の上乗せを政府に求めてくれる人物さえいたほど困窮していたことが分かっている。彼は生涯独身で、福音派の信者であった。

2. 業績

ヒムリーの業績は、Walravens (1984) によれば3つに分類できる。まず、おもに東アジアの一次資料に基づいた遊戯史研究である。つぎに中国および中央アジアの歴史および地理に関する研究 (トルコ語、モンゴル語、中国語の地名についてなど)、最後に言語、とりわけ東南アジアの言語研究 (モン族やチャム族の言語についてなど) である。遊戯史に関しては、最初期のも

のとしては象棋について論じたHimly (1870a)があり、晩年にあたる1895年から1901年にかけては『満州語辞典 遊戯』の連載をおこなっており、分量の点からいえば、将棋系ゲームだけでなく双六やカードゲームにも重点をおいている。これらの研究において、ヒムリーはおもに中国語の事典類を資料として利用しているが、その一方で、1880年代に刊行された西洋の最新の研究も参照している。しかし、ヒムリーが研究成果を東洋研究関連の専門誌や住居のあったハルバーシュタットの地方紙などに寄稿していたため、当時、その成果はチェス愛好家の目にとまることはなかったようである⁶⁾。

それでは、彼の象棋史研究は、ヨーロッパにおける研究史においてどのように位置づけられるのだろうか。欧米の言語による象棋史研究の歴史を、Banaschak (2001) は以下の5つの時期に分けている。

1. 1870年以前：象棋というゲームの記述⁷⁾
2. 1870年～1913年：中国語による一次資料に基づく最初期の研究
3. 1913年～1962年：さらなる資料に基づくMurray (1913)の補完
4. 1962年～1990年：「ニーダム以降の時代 (Nach-Needham-Ära)」(Banaschak 2001: 44)
5. 1990年以降：中国語による研究成果の受け入れ

このうち第2期が、ヒムリーが象棋に関する最初の論文(同時に、将棋の伝来にふれた最初の論文)を公刊した1870年から、彼の研究に基づいてLinde (1874)の象棋および将棋の節が書かれ、それらの記述がMurray (1913)に引き継がれていった時期にあたる。Murray (1913)は、その後の50年間にわたり影響を持ちつづけ、新資料の発見は彼の研究を補う形で利用されていく⁸⁾。ヒムリーは、Corff (2019) が把握しているだけでも生涯に10本の将棋系ゲームに関する

論文および新聞記事を発表しているが、とりわけHimly (1870a)は、中国語の文献に基づくヨーロッパ最初の象棋史研究論文とみなされており、注目に値する⁹⁾。

このように、象棋史研究の分野において画期的な業績を残しているヒムリーだが、生前、研究者として評価されることはなかった。彼の同時代人で、北京で通訳官をつとめた後にベルリン大学教授になった中国学者のアルフレート・フォルケ (Alfred Forke, 1867-1944) は、1904年に所属機関の上長にたいし、ヒムリーを以下のように評している¹⁰⁾。

もし、中国の言語や文献、文化の研究を生涯の課題とする人物を「中国学者」とみなすのであれば、私は彼を「中国学者」と呼びたくはありません。[...]ヒムリーは、なによりも言語学者なのです。ただ、これは、彼が中国学者に必要な能力を十分にもっていない、という意味ではありません。彼以前の研究者たちもまた、そのような能力を常に完璧に有していたわけではありませんし。

ヒムリーの専門分野は、南アジア、とりわけインドシナの単音節言語で、このテーマに関しては次の著作があります。[...]

そのほか比較的大規模な研究としては、ライデンで刊行されている年刊誌『通報 (Tung-Pao)』に連載している「満州語事典 遊戯」がありますが、まだ完結していません。その他に、中国人や日本人、その他の民族がおこなっているチェスやボード・ゲームに関する小論がいくつかあります。[...]

ヒムリーの業績は、さまざまな雑誌に散らばっています。彼は、精力的な書き手ではなく、一流の中国学者であれば出版しているような大著は、私の知る限りではありません。

しかし、雑誌や論集に寄稿した評論や一般向けの記事をつうじて、東アジアに関する

る知識をドイツに広めることにヒムリーは貢献してきました。(Zit. nach Corff 2019: xvf.)

フォルケは、東アジアについて様々な「小論」を書いてきた人物としてヒムリーに一定の評価を与える一方で、まとまった研究書を著していないことから、学者としては二流だとみている。実際のところ、ヒムリーは東アジアを対象とした将棋系ゲーム史研究のヨーロッパにおける先駆者であり、また遺作となる『通報』における連載など、このテーマをライフワークとしていたようにみえるにもかかわらず、晩年にいたるまで散発的に研究成果を発表するだけであった。また、中央アジアの地名や東南アジアの言語についても研究をおこなうなど、発表媒体だけでなく研究テーマも「散らばっている」。この姿勢は、交流があったオランダ出身の歴史家アントニウス・ファン・デア・リンデ (Antonius van der Linde, 1833-1897) が、「精力的な書き手」であり、その大著『チェス・ゲームの歴史と文献』(1874)によって将棋系ゲーム史研究の大家として名を残したのとは対照的である¹¹⁾。ただし、ヒムリーが同時代人から「一流の中国学者」にふさわしいと評価されるような研究書を著せなかったのは、彼の性格や学問的な能力の問題ではなく、定職につけないほど悪かった健康状態のため継続的な研究ができなかったからだと思われる。

Ⅲ ヒムリーによる象棋および将棋史研究

1. 将棋系ゲームの起源と初期の伝播

チェスに親しんでいるヨーロッパ人の目には、東アジアの将棋系ゲームはあまりにも異質に映ったようである。象棋について論じた最初の論文でヒムリーは、象棋もまたチェスと同じ起源をもつことを、以下の共通点から主張している。(1)河界を除けば象棋の盤も8×8マス、(2)駒数が16×2枚、(3)両端の駒(「車」とルー

ク)が同じ動き、(4)両端から2番目の駒(「馬」とナイト)も同じ動き。このうち、とりわけ「馬」の動きの共通性を、将棋系ゲームが同じ起源をもつことの確かな証拠とみなしている¹²⁾。

この共通の起源について、ヒムリーが活動した19世紀末はまだ、インド発祥か中国発祥かという議論で揺れていた時代である。この点について今日では、古代中国でおこなわれていた遊戯が東アジアにおける将棋系ゲームの発展に影響した可能性はあるにしても、発祥地をインドとするのが定説になっている。ヒムリーもまた、このテーマを扱った最初の論文(1870年)においても最後の論文(1898年、『満州語辞典遊戯』所収)においても、一貫して、ゲームおよび駒の名称(とりわけ戦象を表す「象」の駒)を根拠としてインド説を支持している¹³⁾。現代の視点から奇妙に思われるのは、将棋系ゲームの起源について論じる際に、彼がカンボジアについて言及している点である。彼は、象棋史を論じた最初の論文において、インド起源説と並んではあるが、なんとカンボジア起源説を提唱している。

それ[将棋系ゲーム]が中国からインドにもたらされたのか、インドから中国にもたらされたのか、それとも、カンボジアから両国にもたらされたのか、それはまだ明らかではない。ペルシャの伝承によれば、カナウジの王に仕える大臣がその発案者だとされているが、それはカーニャクブジャ (Kanyakubja)¹⁴⁾の王ではなく、カンボジア (Cambodia)の王だったということも、まったくあり得ないことではない。近年の調査によって、この国では、これまで長いあいだ忘れ去られ埋もれていた驚くべき文明の遺跡が、いくつも発見されているのである。いずれにせよ、このゲームの発祥地としては、象が兵器としてよく知られていた国を想定すべきである。たしかに、中国でも古代においてはそうであった。しかし、この点ではインドかカンボジアの方

が、可能性が高いように思われる。(Himly 1870a: 121)

この主張は、古代カンボジアの研究が進んだ今日の見れば、珍説の類に思われるだろう。しかし、ヒムリーが「近年の調査」と呼んでいるように、ヨーロッパ人がこの地域の調査を始めたのはようやく1850年代に入ってからである。また、彼が「驚くべき文明の遺跡」と呼んでいるのはアンコール遺跡群のことだと思われるが、この遺跡が注目されたのは1860年、碑刻文の解読が進みそれらが9世紀以降に刻まれたものだと明らかになるのは、この論文が書かれた後の70年代から80年代にかけてであった。したがって、彼がカンボジアの古代文明を過度に重視したことにも理由がないわけではない。なお、サンスクリット語や古クメール語で書かれた碑刻文に最初に注目したのは、1864年に遺跡群を訪れた人類学者アドルフ・バスティアン(Adolf Bastian, 1826-1905)である。彼はまた、おそらくはドイツ語圏に初めて東南アジアの将棋系ゲームに関するまとまった情報を提供した人物でもあり、Linde (1874) や Murray (1913) も彼の報告を参照している¹⁵⁾。彼については、将棋の伝来に関連して後述する。

その後、ヒムリーは1889年の論文で、カンボジアに関する研究が進んだことから、将棋系ゲームを表すカンボジア語(「オク・チャトラン」)にサンスクリット語の名残があること、古代カンボジアがインドや中国と交流していたことなどが、新たに分かったとしている¹⁶⁾。そして、1898年の論文ではインド起源説のみを挙げているが、それでも彼は、カンボジアにおける将棋系ゲームの古さを以下のように強調している。

たしかに、駒に関しても盤に関しても、このゲームに複数の先駆けがあったのかもしれないが、本来のチェスは戦争を模したものであるとしてインドで成立したように思われる。そして、6世紀から7世紀にかけ

て、そこから西方へはペルシャへ、東方へは明らかにカンボジアへと伝わっていった。ペルシャと同様に、カンボジアでも、「4部隊」を意味するサンスクリット語の名前“caturanga”が転訛した名前でのこのゲームが呼ばれていることが、その証拠である(ペルシャ語では“catrang”, カンボジア語では“chötrang”という)。(Himly 2019: 55)

今日では、ミャンマー、タイ、カンボジアはそれぞれ伝統的な将棋系ゲームを維持しており、駒の動きがほぼ同一であることから、これらの国々がクメール帝国(9世紀~15世紀)の影響下にあった時代に将棋系ゲームが伝来したと考えられている。ところが、マックルックやシットウイン(ミャンマー将棋)に関してはヒムリーの生前からあるていどの情報がヨーロッパにも伝わっていたのにたいし、オク・チャトラン(カンボジア将棋)に関してだけはなぜか20世紀にいたるまでほとんど情報が入ってこなかったようである。もし、ヒムリーがカンボジアでプレイされているゲームについて知識を得ていれば、それがより古い将棋系ゲームの姿を残していることから、自説を強化したのではないかと思われる¹⁷⁾。

では、カンボジアには7世紀までに伝来したとする一方で、中国伝来はいつ頃だとヒムリーは考えていたのだろうか¹⁸⁾。この点で、彼は最初の論文ですでに、古代中国の文献に記された各種の遊戯を紹介した後、「今日プレイされているものとはほぼ同様の象のチェス[象棋]に関する最古の歴史的証拠」(Himly 1870a: 109)として『格致鏡原』に引用された『玄怪録』の一節を挙げている。彼は、作中の出来事があったとされる宝応元年(762年)からか、『玄怪録』が8世紀末に書かれたとみなしているため、将棋系ゲームは8世紀のうちには中国に伝来していたと考えていたことになる。ただし、作者とされる牛僧孺(779-849)の生没年を考えると、同書の成立時期に関するヒムリーの推定は、やや早

すぎるように思われる¹⁹⁾。なお、インド起源説を支持していることから明かなように、ヒムリーは後周の武帝(543-578)によって創られたとされる「象戯」を、将棋系ゲームの一種である可能性を指摘しつつも、現行の象棋とは異なる天文に関するゲームだと考えている。そのため、伝来時期に関しても、『象経』が書かれた時期(569年)を考慮していない²⁰⁾。

2. 『玄怪録』と「宝応象棋」

『玄怪録』は、将棋史研究の観点からもしばしば取り上げられているが、ヒムリーは、1870年の時点ですでに、同書において描写された象棋、いわゆる「宝応象棋」の「車」の動きが現行の将棋と共通していることを指摘している。これは、同様に両ゲームの類似性を指摘した幸田露伴の「将棋雑考」(1900)が書かれる30年まえである²¹⁾。また、1873年の論文では、将棋の駒を紹介したあとで以下のように明言してさえている。

ここで、「兵」[歩兵]の駒が9枚ではなく6枚であったなら、それは『玄怪録』のものに最も近いゲームである。なぜなら、どちらのゲームでも「車」が後ろへ戻ることができないし、『玄怪録』におけるゲームにおいても同様に、「将」と呼ばれる駒が「他の将棋系ゲームよりも」より多く存在しているように思われるからである。(Himly 1873: 127)

ただし、彼自身による以下の引用から分かるように、参考にした書籍に欠落があったのか彼が写しまちがったのかは不明であるが、彼が把握していたのは物語の一部だけであり、「王」は登場せず、さらには「卒」の動きに関する「そして次の太鼓でそれぞれ歩兵が一人、横に一尺移動した」(高橋2018: 77)という重要な個所が欠けている²²⁾。

牛僧儒[孺]玄怪録寶應元年汝南岑順於呂氏故宅夜聞鞞鼓聲介胄人報曰金象將軍傳語

輿天那賊會戰順明燭以觀之夜半後東壁鼠穴化爲城門有兩軍列陣[陣]相對部伍既定軍師進曰天馬斜飛度三止上將橫行擊四方輻車直入無迴翔六甲次第不乖行於是鼓之兩軍俱有一馬斜去三尺止[又鼓之各有一歩兵橫行一尺]又鼓之車進須臾砲石亂下云云因發掘東壁乃古冢有象戲局車馬具焉 (Zit. nach Himly 1870a: 109)

ヒムリーは、『満州語辞典』においては、このわずかな記述から記録に残る最古の象棋を再構築しようと試みている。この試みはMurray(1913)において言及されているため、彼の業績としては知名度が比較的高いだろう。もっとも、彼は、『玄怪録』における記述を、当時の象棋をそのまま記したのではなく、文学的な表現を用いて書かれた「不思議な物語」(Himly 2019: 61)とみなしている。「宝応象棋」の再現についても、そこに記された不十分な情報に基づいて、ひとつの解釈を述べてみただけにすぎない。たとえば、「六甲」の解釈をめぐる矛盾点が出てくることに関して、「この個所は色々と不正確あるいは不完全に引用されているのだ、という言い訳もできる」(Himly 2019: 69)と述べている²³⁾。

まず、盤については、何も言及されていないことを指摘したうえで、11路の盤だったと想定している。というのも、彼は、事典類に引用された北宋の晁補之(無咎, 1053-1110)および明の胡應麟(1551-1602)の著作をもとに、北宋では11路の盤で象棋がプレイされていたが囲碁用の19路の盤を使った変種も創られた、唐においても宋と同様の象棋がプレイされていた、と考えていたからである。そのため、彼は、唐代では、すでに8×8マスではなく11路、あるいはベルシャの叙事詩『シャー・ナーメ』(1010)に登場するチェスのように10×10マスの象棋が(そのほかの変種と並行して)プレイされており、対称形にするために界河はなかった、と想定している。ちょうど、「六甲」を6枚の「卒」と解釈したヒムリーにとって、それらを左右均

等に配置できる11路の盤は都合が良かった²⁴⁾。

駒に関しては、文中で「将」、「帥」、「車」、「馬」、「炮」が言及されている。とヒムリーは主張する。このうち、「帥」は「軍師」の読み間違いだと思われる。また、「六甲」を「6人の鎧を着た者」(Himly 2019: 62)と訳し、(ヒムリーによる引用では「歩兵」という語が欠けているので)「卒」の文学的な表現である可能性を指摘している。そして、「士」と「象」にあたる駒が言及されていないことについては、「上将」がそれらの駒に相当するのかもしれない、と推測している。しかし、「金象將軍」を「将」に当たる駒とみなす一方で、後述するように、「宝応象棋」の再現にあたっては「金象」を「象」の駒として扱っている²⁵⁾。

作中で言及されていると主張する駒のうち、彼が現行の象棋と同じ動きだと考えているのは、「馬」と「炮」で、「馬」に関しては、『玄怪録』における記述は桂馬跳びを表していると理解し、現行の象棋と同様としている。また、「炮」についても、「入り乱れて落ちてくる「砲」の石という表現は、今日の「炮」が敵の駒をとるとき動きを暗示しているように思われる」(Himly 2019: 64)と述べている。8世紀の時点ですでに「炮」の駒が導入されていたと考える根拠は、「砲石亂下」のくだりをこのように解釈しているからであるが、この点については、「炮」の駒がドイツ語では“Geschütz”(火砲)と訳され近代兵器を想起させることからか、この駒は投石器を表しており、『後漢書』の袁紹伝を引いて、この種の兵器がすでに古代中国にあったことをわざわざ指摘している²⁶⁾。しかし、「天馬」、「上将」、「輜車」、「六甲(歩兵)」とは違い、「軍師」と同様に「砲」についても作中ではその動きが説明されているわけではないので、駒の名称として言及されたのではない可能性が高い²⁷⁾。

「上将」に関しては、「撃四方」から斜め四方に動ける「士」あるいは「象」の駒である可能性があるとしつつも、「横行」とされる点から、今日の「将」と同じ動きをする別の駒である可能性も指摘している。さらに、将棋史研究の視点

から興味深いのは、日本の将棋に「角行」という名前の駒があることから、「上将横行」が2種類の駒名の併記である可能性を挙げ、「上将横行撃四方」のくだりを「上将」と「横行」は四方を攻撃する」(Himly 2019: 65)とも訳せる、としていることだろう。そして、その傍証として、『和漢三才図会』の中象戯(中将棋)の項を引いて「実際に、中象戯には「横行」という駒がある」(Himly 2019: 65)と述べている。また、「上将」に関連しては、この話の結末でこの怪異の正体であるゲームが「象戯」と呼ばれているにもかかわらず、「金象將軍」を除けば「象」という語が出てこない一方で、異なる種類の「将」が登場することを特異な点として挙げている(1873年の論文では、疑問符つきではあるが「金象」が金将である可能性も指摘している)。そして、異なる「将」が用いられるゲームとして、以下のように将棋に言及している²⁸⁾。「日本のゲームには、いくつかの「将」の駒があり(脚注参照)²⁹⁾、日本のゲームそのものが[...]将棋と呼ばれている(shōgiと発音する)」(Himly 2019: 65)

将棋史との関連でとくに重要なのは、『玄怪録』における「輜車」と将棋の香車の共通性に関する、ヒムリーの指摘である。彼は、1870年の論文ですでに「日本のゲームにおける「車」[香車]が後ろに下がれないことは、上述の『玄怪録』との関連で述べた古代中国のゲームと共通の特徴である」(Himly 1870a: 116)と述べている。1898年に公刊された『満州語辞典』の記事では、以下のように、この共通性についてより詳しく言及している。

「車」は、今日のものと同様に前へ進む。横への動きについては述べられていないが、その一方で、今日のものとは違い、後ろへ行けないことがわざわざ述べられている。この点で、日本のゲームで両端に配置され、同様に後ろに進むことができない「車」[香車]と、金の司令官の駒[金将]への昇格を除けば、一致している。(Himly 2019: 64)³⁰⁾

「輜車」に関しては、宋代の青銅製の駒における図案で軍事物資を運ぶための荷車として描かれており、現行の象棋の「車」ではなく香車に相当する弱い駒だった可能性が高い。ヒムリーもまた、古代中国でも戦争に戦車が用いられていたことを指摘し、本来は「戦車」を表す駒だったはずとしながらも、「宝応象棋」の駒を「荷車」と訳している。その一方で、象棋について最後に論じた『満州語辞典』では、脚注としてではあるが、象棋の「車」に相当するルークがドイツ語では「塔 (Turm)」と呼ばれることから、「輜車」に似た「輦車 (巢車)」という語を紹介し、それが「塔」と同様に可動式の物見櫓を意味し、紀元前573年に楚と晋との戦いに兵器として用いられた記録があるとも指摘している。残念ながらそれ以上の言及がないため、ヒムリーがここで、「輜車」が「輦車」の書き誤りであり、さらには「塔」と「車」は同系統の名称だと主張したかったのかどうかは不明である³¹⁾。

これらの考察をおこなったうえで、ヒムリーは「宝応象棋」の再構築をおこなっているが、初期配置に関しては、『満州語辞典』で言及されたものとMurray (1913) に掲載されたものとが異なっている³²⁾。ヒムリーは、まず、上述のとおり、盤は界河のない11路のものを想定し、6枚の「六甲」が等間隔に並ぶと考えている³³⁾。

司令官〔将〕の左右に駒がなく、その前に例えば「上将」か「金象」が1枚だけあると想定し、残る9枚の駒がすべて対局者からみて1列目に並ぶとすると、具体的には、およそ以下のような配置を考えることもできるだろう。

- a 列：1「車」、2「馬」、3「金象」、4「炮」、5(空)、6「將軍」あるいは「帥」、7(空)、8「炮」、9「金象」、10「馬」、11「車」
- b 列：6「上将」のみ
- c 列：1, 3, 5, 7, 9, 11「六甲」(Himly 2019: 66)

「上将」のみを1枚と仮定したのは、名称だけでなく動きも同じだった可能性があるフィルズ(将)からの連想かもしれない。しかし、11路の盤に左右対称に配置するためとはいえ、現行の象棋の「士」から枚数も配置も変えてまでなぜフィルズに合わせたのか、なにも説明がないため分からない。「王不見王」のルールがすでに唐代にあったと考え、何らかの駒を「将」の前に置く必要性を感じたからだろうか³⁴⁾。いずれにしても、この再現では駒の初期配置が将棋と同様に手前から3列になっている。「車」の動きや異なる「将」の存在という将棋との共通点から、情報が少なすぎる「宝応象棋」を再構築するにあたって、とくに将棋からの情報で足りない部分を補ったのかもしれない³⁵⁾。

なお、「宝応象棋」に関して、マレーは、物語に記されているのは不完全な情報しかないが、このゲームの駒の動きが象棋(「将」と「馬」と将棋(香車と歩兵)が合わさったものであることを示している、と述べている。また、彼は、ヒムリーが再構築したゲームが、アラビアやペルシャでおこなわれていたとされる「10マス・チェス(decimal chess)」に似ているとも指摘しているが、これはヒムリーが『シャー・ナーメ』に登場するチェスと呼んでいるゲームである³⁶⁾。

3. 将棋の伝来

将棋の伝来に関しては、中国伝来説と東南アジア伝来説がある。両説について、清水(2017)は以下のように要約している。

ここで注意しなければならないのは、現在は東南アジア伝来説といっても直接的に東南アジアから日本列島へ将棋が伝来したと考える研究者はいないと思われることである。[...]したがって、東南アジア伝来説とは、インドから東南アジアに伝わった将棋が一時期の中国大陸もしくはその港で遊ばれ、それが日本列島に伝わったとするものと理解してよいであろう。これに対して、

中国伝来説はインドから東南アジアを経由せず中国大陸へ伝わった将棋が日本列島へ伝わったとするものである。(清水 2017: 36)

歴史的な資料に基づいて将棋の伝来過程を考察した場合、清水 (2017) が主張する中国伝来説がもっとも説得力があるように思われる。それは、すなわち、10世紀後半から11世紀前半にかけて宋に渡った僧侶または貴族によって文字駒を用いる9×9マスの将棋系ゲームが伝来したか、あるいは実物のない状態で僧侶たちが帰国後、記憶をもとに仏教的な思想をまぜて将棋をつくった、というものである³⁷⁾。

中国伝来説は、古くから(明確な根拠もなく)支持されてきたものである。たとえば、唐の宮廷を訪れた吉備真備(695-775)が将棋の原型となったゲームを日本に伝えたという説や、清水(2017)と同様に宋に渡った僧侶が伝えたとする説などをBanaschak(2001)は挙げている。そのうえで、ヨーロッパの象棋研究者が将棋の歴史について指摘してきたこととして、中国伝来説を支持する以下の理由を紹介している。(1)1列目の駒の並びがチャトランガおよび象棋と同じこと、(2)「宝応象棋」における駒の動きが将棋と同じこと、(3)日本文化一般にたいする中国の影響から将棋の原型も中国から伝来したと考えられること、(4)1970年代までの日本の研究者も総じて中国伝来説を主張していること。ただし、ヨーロッパにおいては、そもそも将棋自体が1970年代半ば以降にようやくプレイされるようになったため、将棋史への関心は低かった³⁸⁾。

しかし、ヒムリーも指摘しているように、中国から渡ってきたはずの将棋が現行の象棋とはかなり異なっており、また、象棋が日本で知られていないことなどが、中国伝来説にとって否定的な要素であった。そして、1980年代以降、日本では将棋史への関心が高まり、増川宏一の研究などそれまで知られていなかった文献にもとづいた研究がみられるようになる。その過程

で、中国伝来説に懐疑的な立場をとるものも現れた³⁹⁾。そうした立場から提唱された説のうちの一つが、東南アジア伝来説である。この説が広まったきっかけは、ゲーム作家のアレックス・ランドルフが1971年に発表した雑誌記事とされている。この記事について、清水(2017)は、「特にマックルックとの類似性を指摘し、東南アジアから日本列島への将棋の伝播過程についての議論はなかったが、将棋の東南アジア伝来説を最初に日本で主張したものとしてよいであろう」(清水2017:34)としている。そこで指摘されている「将棋と南東同族を結ぶリンク」(ランドルフ1971:117)とは、銀将および歩兵相当の駒の動きに関するものであり、後述する1879年の『ライプチヒ絵入り新聞(Leipziger Illustrierte Zeitung)』における記事ですでに指摘されていることだけである⁴⁰⁾。この記事への匿名の情報提供者がMurray(1913)で指摘されているようにヒムリーであれば、彼は19世紀のうちに、ドイツ語圏に将棋の中国伝来説だけでなく(ランドルフと同程度には)東南アジア伝来説も伝えていたことになる。

まず、彼は、Himly(1870a)において「弘法大師」(空海, 774-835)による伝来説を紹介している。これは、ヒムリーが将棋の伝来について述べた最初の例であるが、この説はLinde(1874)に引き継がれる一方で、Murray(1913)によって根拠のない説として否定的に引用されている⁴¹⁾。ただし、該当箇所は、そもそも、古代中国における象棋の盤の大きさと駒の数を論じている箇所であり、あくまでも盤が大きく駒数も多い象棋のバリエーションとして将棋にも触れているだけである。

もし、かつては[象棋盤の]路やマスの数が多かったのであれば、駒の数もまた多かったと考えることができる。たとえば、西暦820年ごろに生きていた弘法大師によって中国から日本に伝えられたと言われている日本のチェスは、盤に関しては[象棋より]横に1マス多く、その一方で、駒に関して

は 8 枚多い。(Himly 1870a: 111)

また、Himly (1873) では、同説を『玄怪録』で描かれたゲームとの関連で、やや具体的に以下のように述べている。

『玄怪録』が成立した時期からほどなくして、具体的には 9 世紀初めの数十年のうち、中国に滞在していた弘法大師が、そこから改善された仏教とチェスを日本にもたらしたのである。(Himly 1873: 126)

しかし、彼はいずれの論文でもこの説の出典を挙げていない。このことは、その他の個所では文献史料を挙げつつ自説を主張しているヒムリーにしては、杜撰に思われる。また、彼が日本に関して論じるさいに参考文献としてたびたび挙げている『和漢三才図会』では、「将戯」の起源は不明とされている。これらのことから、空海による伝來說に関しては、中国滞在中の将棋仲間からこのような話を聞いたことがあった、というだけの可能性が高く、上述の吉備真備による伝來說と同様に扱うべきだろう⁴²⁾。

いずれにせよ、この主張からは、1870 年代初頭の時点では、ヒムリーは、現行の将棋と象棋が多く、多くの点で異なっていること（交点ではなくマスに駒を置く、盤上に界河がない、駒数が異なる、「車」および「馬」の動きが異なる）を認識しつつも、将棋が古代の象棋（たとえば「宝応象棋」）から派生したとする説に疑念を持っていなかったようである。そして、将棋と象棋の共通点として、3 列で構成される初期配置を挙げている（1 列目に「卒」、2 列目に「炮」、3 列目にその他の駒）。そのうえで、中国から伝来したはずの将棋が、現行の象棋と多くの点で異なることを根拠として、インドと同様に古代の中国にはさまざまなタイプの将棋系ゲームがあったのだ、とも主張している⁴³⁾。

ところが、1879 年に発表した将棋をテーマとした唯一の論文では、一転して、以下のように述べている。

[将棋は] 現在、中国で日常的にプレイされているものともかなり異なっており、オリジナル [チャトランガ] との現代まで引き継がれている共通点もほとんど一致していないため、直接であれ（その他の中国文化のように）朝鮮経由であれ、中国からこのゲームが日本に伝わったと考えることは難しい。どちらのチェス・ゲームに関しても、他国から伝わったという史学的な証拠を私はまだ示すことができない——むしろ、どちらのゲームも、これらの国独自のものであるかのように思われる。(ヒムリー 2020 : 136 以下)

そのうえで、ペルシャの双六系ゲームが日本に伝わり、両国には同タイプのゲームが残っているが、その中間の地域ではその後、別のタイプのゲームが広まったという例を挙げ、以下のように主張する⁴⁴⁾。

このような飛び石的な伝播は珍しくないし、チェス・ゲームに関しても、日本のチェスは、今日の中国のものよりもむしろシャムのものに近い。(Ebd.: 137)

上述したように、シャムと日本のチェス・ゲームには複数の共通点がみられるが、そのひとつが本稿で紹介した「銀の司令官」[銀将]の動き方の一致である。(Ebd.: 142)

また、1885 年の新聞記事では、仏教と将棋系ゲームの関係を強調したリンデの説を援用して以下のように述べている⁴⁵⁾。

リンデが[...] 指摘したように、シャムのゲームに戦争を厭う仏教の影響がすでに見られ、それがこのゲームの東アジアへの伝播と変化に関わったのであれば、日本のゲームにはそれがより明らかに表れているはずである。(Himly 1885: 11)

これらの指摘からは、仏教の伝播にともなうて、インドから東南アジアに渡ったゲームが(中国を経て)日本にまで至ったが、東南アジアと日本の中間にある地域では別のタイプのゲーム(たとえば象棋)が広まった、とヒムリーが考えていたことが推測できる。ただし、ヒムリーもリンデも、7世紀に中国からインドへ渡った玄奘(602-664)や9世紀に日本から中国に渡った空海の事績を正しく把握しているのだから、仏教と将棋系ゲームの伝播経路が合わないと思わなかったのか、という疑問が残る。いずれにせよ、ヒムリーは後年の論文でも「宝応象棋」と将棋の類似性を主張しているのだから、古代においては東南アジア、中国、日本で似通ったゲームがプレイされていたと考えていたことになる⁴⁶⁾。

しかし、ヒムリーが将棋をテーマとした論文で具体的に挙げている将棋とマックルックとの共通点は、銀将とコーンの動きだけであり、それも銀将について述べた個所ではなく「付記」において言及しているにすぎない。また、将棋を紹介した新聞記事でも、銀将の動きを紹介したあとで「シヤムのチェスのコーンもこのように動く」(Himly 1885: 12)と述べているだけである⁴⁷⁾。この控えめな言及については、おそらく、当時の定説であった中国伝來說に反する東南アジア伝來說を主張するには、両ゲームの関係を裏付ける「史学的な証拠」が欠けていることがその原因だろう。遺作である『満州語事典』で将棋を紹介した際にはその伝來に触れていないため、彼が最終的にどのように将棋伝來をとらえていたのかは分からない。

では、ヒムリーは両ゲームのどのような共通点を認識したうえで、このような控えめな指摘をしたのだろうか。東南アジアの将棋系ゲームについて、Linde (1874) は前述のバスティアンが『ライプチヒ絵入り新聞』に寄稿した記事を引用している。すなわち、1863年のシットゥインに関する記事とその翌年のマックルックに関する記事である。おそらく、当時のドイツで読めるものとしてはもっとも詳細な報告だとみなしたのだろう。世界中を旅した人類学者とし

て著名なバスティアンは、1861年から65年にかけてインドシナ半島と東アジアを旅行しており、この旅においてインドシナ半島の将棋系ゲームやアンコール遺跡群の碑刻文に出会ったのである。ここではすでに図版付きで、コーンが斜め四方と前方へ1マスずつ動くことと、ビアが自陣3列目に配置され、敵陣3列目で裏返ってメットに成ることが紹介されている。ヒムリーも、後年、論文や新聞記事でこれらの記事に言及しているのだから、ここから東南アジアの将棋系ゲームと将棋の類似に注目したのかも知れない⁴⁸⁾。

Murray (1913) では、おなじ『ライプチヒ絵入り新聞』に1879年に掲載されたマックルックに関する記事も参照されており、マレーは同記事をヒムリーによるものとみなしている。しかし、この記事は匿名の新聞記者によって書かれたものであり、情報提供者は「バンコク在住のあるドイツ人」(Anonym 1879: 299) となっており、名前を挙げられていないうえ、上述のとおりこの時期のヒムリーはすでにドイツに帰国している。これは、1864年の記事におけるバスティアンとは違い、学者としては無名だったヒムリーからの情報を権威づけるために、「バンコク在住」という虚偽情報を掲載したのだろうか⁴⁹⁾。

同記事がヒムリーからの情報提供に基づいていたのであれば、将棋とマックルックの共通性について、彼は、ヒムリー (2020) でも指摘している銀将とコーンの動き以外にも、歩兵とビアの類似を強調している。同記事では、ビアの駒がチェスのポーンと同様の動きをするという説明のあとで、以下の点が指摘されている。

その他の点では、これら[ビア]は日本の歩兵ととてもよく似ており、どちらも盤の手前から3列目に配置され、敵陣の最前列、つまり敵のビアが配置されていた列で裏返り、昇格することができる。(Anonym 1879: 300)

もっとも、歩兵が強力な金将に成るのにたいし、ピアが成るメットはフィルズと同じ動きしかできない、という違いも述べている。また、将棋にかぎらないが、マーの名前と配置、動きを「すべてのチェスが共通の祖先を持つことのもっとも確かな証拠」(Ebd.)としている⁵⁰⁾。

なお、将棋とマックルックの共通性については、ヒムリーの同時代人であるイギリスの建築家エドワード・ファルケナー (Edward Falkener, 1814-1896) も言及しており、そうした言及をした最初の人物とされることがある⁵¹⁾。しかし、Falkener (1892) は、将棋とマックルックとの類似だけを述べているわけではないし、とりわけ、銀将の動きを「ビルマと日本から」受け入れたとしている点に注意が必要だろう⁵²⁾。この点では、1879年の時点でマックルックと将棋との共通性に焦点をあてたヒムリー (あるいは匿名の情報提供者) のほうが、両者の関係を指摘した「最初」の人物とするにふさわしいだろう。

また、ヒムリーの論文や新聞記事を参照したMurray (1913) も、当然、両ゲームの共通性に触れている。しかし、彼は明確に中国伝説をとっており、記録が残っていないほど古い時代に将棋は古代の象棋から派生したとして、「古いタイプの中国のチェスが修正されたものの一種が日本のチェスであり、現代の中国のチェス (およびこれによく似た朝鮮のゲーム) はまた別の修正がほどこされたものである、と考えるべきである」(Murray 1913: 119) と断言している⁵³⁾。マレーは、伝来時期については確かな情報がないとし、ヒムリーの論文に由来する空海が日本に伝えたとする説を紹介する一方で、『和名類聚抄』などに記載がないことから10世紀までは伝来していなかったのだろうと指摘している。そして、伝来経路については、将棋とマックルックとの共通性だけに基づいて、史料的な裏付けもなく「別のルート」を主張するのは説得力に欠けるとし、中国の文化が日本に伝わる際の「通常のルート」として朝鮮経由でのルートを挙げ、将棋系ゲームもその経路で伝

わったのだろうと想定している⁵⁴⁾。

唐代に書かれた『玄怪録』も空海の入唐求法も知っていたヒムリーが、なぜ将棋の伝来に関して東南アジアに目を向けるようになったのだろうか。その一因としては、なによりも、まず、彼が象棋や将棋の歴史を論じた時期にカンボジアの古代史が明らかになりつつあり、彼の注目がそこに向いたことが挙げられる。また、別の理由としては、象棋とは異なり、マックルックと将棋にはともに、戦争を模したゲームから発展したにもかかわらず仏教色がつよくみられる点を、彼が(おそらくはリンデの影響で)重視したことが挙げられるだろう⁵⁵⁾。

ヒムリーとされる上述の情報提供者は、「仏陀の信奉者だけが、チェスがもつ戦争のイメージを背景に押しやるために、早い時期からこのゲームの修正を試みたようである」(Anonym 1879: 300) と主張し、戦象を表す「象」の駒の名前が、コーン(根)という戦争とは無関係の名前になっていることに言及している。この人物は、コーンというのは宗教に関する外来語の短縮形の可能性がある、と考えている。さらには、仏教の七宝を独自に解釈し、「彼ら[仏教徒]が君主にとっての“sapta ratna”あるいは「七宝」と呼ぶものには、具体的には、宝石や金、銀のほかには戦士や廷臣も含まれていた」(Ebd.) と主張したうえで、本来は戦争ゲームである将棋系ゲームに宗教色をまぜるといふ、象棋にはみられない改変の際たるものとして将棋を挙げている⁵⁶⁾。

このように戦争に宗教を混ぜるもっとも顕著な例は日本のチェスにみられ、我々が「王」としてイメージしている中央の駒は「宝石」を表す記号によって表され、その隣は「金」、さらに隣は「銀」の記号で表されている。さらに、「龍王」や「龍馬」という名前にも明らかにインドおよび中国の宗教との関係が表れているように思われる。(Ebd.)

この「龍王」という駒名と仏教の関係については、チェスの一変種について寄稿した新聞記事で、ヒムリーも同様のことを述べている。彼は、シュトレベック式クーリエ・シュピール (Ströbecker Kurierspiel)⁵⁷⁾ をアジア起源とする説を紹介した個所で、将棋系ゲームの発展と仏教の関係を強調するリンデを援用しながら以下のように仏教の影響を主張し、仏教色のみられない象棋との違いを指摘している⁵⁸⁾。

全体としてみれば、チェス・ゲームは戦争を模したものである。日本のチェスで相手の駒をとり、尖った方を反対に向けて自分の駒として用いるとき、それは確かにそうだとはいえる。敵から馬や車、大砲を鹵獲するようなものだからである。しかし、日本のチェスにおける飛車が敵陣に入ると裏返って龍王に成ることができることと知ったなら、そのことだけでも、東アジアの諸民族の宗教をつよく想起させることだろう。[…] 関心をひくのは、なによりも、そもそも駒の成りに輪廻転生の響きが見いだせるだけでなく、シュトレベックではまさに新たに昇格する駒が、クイーンに成るまえに3回ほど2マスずつ後退しなければならない点である。なぜなら、これはちょうど、仏教において一般の人間が[…] 仏陀に至る過程と同じだからである (Himly 1885: 3)

[玉将と金将以外の駒の成りを説明したのち] そもそも駒の成り自体が仏教を想起させるが、龍王のケースに関しては、両者の関係はもはやほとんど疑いようがない。実際に、戦争をきわめて忠実に模した姿を保ちつづけてきた中国のゲームでは、他の駒に成ることがまったく許されない。(Ebd.: 12f.)

仏教的な思想が将棋の駒名に反映されていることは(たとえば仏舎利を表す玉を金と銀で包むなど)、現代の将棋史研究者も指摘している

点であり、そのことが、中国へ渡った仏教僧によって将棋が伝来したとする説の根拠にもなっている⁵⁹⁾。しかし、ヒムリーにとっては、駒の名称に(彼の目からみれば) 仏教的な要素を混ぜて戦争色を薄めようとした点が、将棋とマックルックとを結びつける大きな共通点だったのである。「宝応象棋」がまさに戦争として描かれたこととは、大きな違いである。将棋をもっとも仏教的に変化した将棋系ゲームと考えていたヒムリーとしては、戦争そのもののイメージを引きずる象棋との間に、少しでも距離を置かせたかったのかもしれない。そのような感情的な問題が、そうでなければ歴史的な資料を重視してきた彼に、東南アジア伝来説に言及させたのではないだろうか。

IV おわりに

「史学的な証拠を私はまだ示すことができない」(ヒムリー 2020: 137) ……将棋系ゲームの歴史に関するヒムリーの著作を読むと、しばしばこのような発言に出くわす。彼は、東アジアの言語で書かれた文献にもとづいて象棋の歴史を、そしてその流れのなかで将棋の歴史を考察した最初のヨーロッパ人である。彼は研究者らしく、歴史的資料を重視し、資料の質も考慮しつつ自説を展開していった。そのため、彼は、しばしば断定を避け、自説を暗示するにとどめざるを得なかった。

「史学的な証拠」にもとづくのであれば、清水(2017)が主張するように、将棋は10世紀後半から11世紀前半にかけて宋に渡った僧侶または貴族によって伝来した、と考えるべきである。それ以前の歴史的資料が発見されていないのだから。一方で、『将棋の来た道』において大内九段は、より古い時代に、日本には(文字駒ではなく立像駒を用いる)〈原将棋〉とでも呼ぶべき将棋系ゲームがあり、その後、中国から象棋が伝来し、その影響で文字駒になったのではないかとする「大胆な推論」(大内1998: 43)も述べている。文字駒になるまでは、もっぱら

史料を残せない庶民にプレイされており、このゲームに貴族階級が目をつけて文献において言及するようになったときには、すでに象棋的な駒になっていた、という理屈である。たしかに、そのように歴史に残らなかった〈原将棋〉もあったかもしれない。たとえば、ヒムリーと同じ1870年代に中国で活動したオットー・フォン・メレンドルフ (Otto v. Moellendorff, 1848-1903) は、当時においても、もっとも低い社会階層に属する人々がしばしば、地面に線を引いて盤とし小石を駒として象棋をプレイしていたことに言及している⁶⁰⁾。しかし、こうした推論は、同時代人の証言が書き残されていないかぎり根拠を示すことができないため、その説得力にはかぎりがある。

19世紀のドイツ人であったヒムリーにとって、象棋および将棋史研究に利用できる史料はかなり限定されていた。このテーマを扱った論文における彼の慎重な態度は、研究者としてふさわしいように思う。また、史料が限られていたからこそ、古代カンボジアへの関心から東南アジアの将棋系ゲームにも注目するという、この時代のヨーロッパ人ならではの発想も生まれたのである。

いずれにせよ、(1) 中国伝來說にとって重要な将棋と「宝応象棋」との類似を1870年の時点で指摘し、(2) 東南アジア伝來說の基礎となる将棋とマックルックとの類似を1879年に言及していた、という将棋史研究の歴史におけるヒムリーの業績はゆるがない。今後の将棋史研究において、本稿において紹介した彼の業績が顧みられることを願う。

注

- 1) コルシェルト (2018) ; ホルツ (2019) ; メレンドルフ (2020) ; ヒムリー (2020) 参照。
- 2) Vgl. Himly 1870a: 110f.; Banaschak 2001: 40; 清水 2017: 38f., 129f.; ヒムリー 2020: 136f., 142.
- 3) 同書は、中国学の専門誌『通報』に1895年から1901年にかけて7回連載された記事をまとめたもので、著者が他界したため未完となっている。このうち、本稿であつかう象棋に関する記事は1898年に公開された。これらの記事は、満州語による

事物の解説という枠を超えて、むしろ東アジアにおける遊戯史研究論文になっている。Vgl. Corff 2019a: xf.

- 4) なお、同じく「カール・ヒムリー」として知られる人物に、おもに眼科の分野で活躍した医師のカール・グスタフ・ヒムリー (Karl Gustav Himly, 1772-1837) がいるが、中国学者のヒムリーと同様に19世紀に生きた人物であるため、混同しないよう注意が必要である。Vgl. Walravens 1984: IIIf.; Corff 2019a: xiii; NDB.
- 5) ヒムリーは、将棋の魅力として持ち駒のルールを紹介し、以下のように述べている。「とった相手の駒を相手に対して使えるなら、局面は非常に多様になるはずだ、と思われることだろう。実際にそのとおりで、勝敗がどうなるのなかなか分からないという点が、このゲームをとてもスリリングなものにしている」(Himly 1885: 12) Vgl. Himly 1877: 155.
- 6) Vgl. Walravens 1984: IIIIf.; Corff 2019a: xxviii.; Corff 2019b: 151f.
- 7) 第1期に属する文献にも、伝聞などに基づいて象棋の歴史について触れているものもある。たとえば、幸田露伴も指摘しているように、アイルランドの作家アイルズ・アーウィン (Eyles Irwin, 1751-1817) による1793年の報告において、韓信が駐屯兵のために象棋を創ったとする説が紹介されている。Vgl. Irwin 1793/94: 60f.; 幸田 1951: 2f.; Banaschak 2001: 39; Himly 2019: 51.
- 8) その後の画期としては、ジョゼフ・ニーダムの中国研究をつうじて欧米の研究者の関心が象棋に向いたこと(第4期)、チェス史研究グループ「ケーニヒシュタイン」が結成されたことによって象棋史研究が盛んになり、中国語圏における研究にも目が向けられるようになったこと(第5期)が挙げられている。Vgl. Banaschak 2001: 39f.
- 9) Banaschak (2001) が指摘するように、象棋を中心的なテーマにしたものに限らなければ、中国語による一次資料に基づく研究としては、Himly (1870a) 以前にも、オランダの東洋学者グスタフ・シュレーゲル (Gustave Schlegel, 1840-1903) が1869年に執筆した博士論文「ヨーロッパにおける中国の習慣と遊戯 (*Chinesische Bräuche und Spiele in Europa*)」があり、数ページながら象棋の歴史も扱われている。ここでは、象棋は「紀元前2697年に即位したといわれるほぼ伝説的な皇帝である黄帝が発明したとされるほど歴史が古い」(Schlegel 1869: 14f.) とされ、ヒムリーの論文と同様に、晁補之の著作などに基づいて、もともとは天文に関するゲームであったとされていること、盤の大きさや駒の数にバリエーションがあったことなどが紹介されている。また、ヒムリーは同じ

- 1870年にHimly (1870b) を著しているが、こちらの論文では、もっぱらゲームとしての象棋そのものの記述をおこなっている。Vgl. Schlegel 1869: 14f.; Walravens 1984: IVf.; Banaschak 2001: 40.
- 10) Vgl. Corff 2019: xivf.
- 11) ただし、リンデには印刷術や「野生児」とされるカスパー・ハウザーなどに関する業績もあり、チェス史研究で歴史に名を残したが、それがライフワークだったというわけではない。なお、ヒムリーとリンデには、東アジアの将棋系ゲーム史研究をつうじて交流があっただけでなく、ともにゲッティンゲン大学に通ったこと、孤独な晩年をヴィースバーデンで送ったことなどの共通点もある。Vgl. NDB.
- 12) Vgl. Himly 1870a: 111, 116.
- 13) たとえば、将棋系ゲームの発展に影響を与えたかもしれない中国の遊戯としては、六博や囲碁、打馬などが指摘されている。Vgl. Himly 1870a: 121; Banaschak 2001: 53f.; 清水 2017: 11; Himly 2019: 55, 60, 72.
- 14) ガンジス川上流にあるカナウジの別名。インドの大部分を統一したヴァルダナ朝のハルシャ王が、7世紀初頭にカーニャクブジャ城を都にしている。なお、ハルシャ王と将棋系ゲームの伝承は、7世紀に書かれた彼の業績を称える物語『ハルシャチャリタ』に由来する。増川 1996: 159; 中村 2004: 362 参照。
- 15) たしかに、アンコールが首都となり寺院群が建造されたのはヒムリーが想定した将棋系ゲームの伝播より新しくあったが、古代のカンボジアが国際的な地域であったことは間違いない。たとえば、カンボジアの古代国家である扶南(1世紀～7世紀)はインドや中国とも交流があり、その港跡からは2世紀のローマ帝国のコインも発掘されている。Vgl. Linde 1874: 84f.; Murray 1913: 23; 石澤 2013: 34, 49f., 68f.; 石澤 2021: 24, 48f., 70f.; NDB.
- 16) Vgl. Himly 1889: 415f.
- 17) とりわけ、マックルックとオク・チャトランは、ほぼ同一のゲームである。しかし、オク・チャトランには、すでにマックルックでは用いられなくなった「王」および「乙女」(マックルックのメットに相当)の駒の特殊な動きに関する古いルールが残っている。カンボジアは1863年にフランスの保護国となっており、1887年にはフランス領インドシナ連邦に併合されているため、カンボジア人の遊戯をヨーロッパ人が目にする機会は十分にあっただけである。なお、将棋系ゲームに関する史料として東南アジア最古のものは、アンコール・ワットにある12世紀中ごろのレリーフとされている。Vgl. Murray 1913: 118; 石澤 2013: 49f.; 清水 2013: 18; Cazaux/Knowlton 2017: 77f., 83f.; 清水 2017: 132f.
- 18) 現在では、将棋系ゲームの中国伝来は9世紀前半以前と考えられており、その後、さまざまな変種を経て、北宋末には現行の象棋とほぼ同様のゲームが存在していたとされている。Vgl. Banaschak 2001: 81; 清水 2013: 12f.; 清水 2017: 125.
- 19) 現代の研究者も、『玄怪録』を9世紀の前半までには書かれていたとみなし、象棋について名称以上の情報が出てくる最古の文献としている。なお、増川宏一が『玄怪録』のもつ史料価値を否定していることを、Banaschak (2001) は批判的に紹介している。Vgl. Himly 1870a: 109; Banaschak 2001: 71; 清水 2013: 10f.; 増川宏一 2013: 28f.; 清水 2017: 36f.
- 20) なお、ヒムリーは、『象経』を560年ごろに書かれたと考えていた。また、「象戯」が天文ゲームであると考えた根拠として、『太平御覧』における記述を挙げている。Vgl. Himly 1870a: 107f.; Himly 2019: 56, 69f.
- 21) 幸田 1951: 22 以下, 46; 塩谷 1972: 173, 185, 205 参照。
- 22) 欠落している個所に関しては、Banaschak (2001) に基づいて補った。後年の論文でも直さずにおらず、ヒムリーは、「歩兵」が横に動くことと記されていることを胡応麟の記述をつうじて知ったようである。なお、彼の引用で「云云」と省略されている個所では、このような戦争(の夢)が何日も続いたこと、主人公の様子がおかしくなり、それを心配した親戚が彼を酔わせてトイレへ行かせ、その隙に床下を掘り戻したことが述べられている。Vgl. Himly 1873: 124; Banaschak 2001: 72; 高橋 2018: 77f.; Corff 2019b: 154; Himly 2019: 62, 65f., 68f.
- 23) Vgl. Murray 1913: 124f.; Banaschak 2001: 77f.; Himly 2019: 66, 69.
- 24) Vgl. Himly 1870a: 109f., 115; Murray 1913: 341f.; Himly 2019: 66, 68f.
- 25) Vgl. Himly 2019: 62f., 66, 69.
- 26) この個所は、Banaschak (2001) では「矢石亂交」(Banaschak 2001: 72)となっており、そもそも「砲」という語が出てこない。なお、独特な動きをする「砲」について、1873年の時点ではまだ、ヨーロッパの研究者の間でも理解がすすんでいなかったようである。ヒムリーは、「砲」が敵の駒をとるさいにとび越える駒は敵の駒でなければならないのか、それとも敵味方どちらの駒でもよいのか、という問題をとりあげ、敵味方どちらの駒でも良いとわざわざ言及している。Vgl. Himly 1873: 128; Banaschak 2001: 76; Himly 2019: 58f., 62f.
- 27) ただし、高橋 (2018) では該当個所が「武器や大砲、矢や石が乱れ飛び」(高橋 2018: 77)と訳されており、幸田露伴も物語に出てくる「砲」を駒の名称と

解釈している。また邢(2018)も、「上将」や「天馬」ほど確実ではないとしながらも、投石器を表す駒があった可能性も捨てていない。幸田1951:25; 塩谷1972:186; 清水2017:124; 邢2018:36以下参照。

- 28) ヒムリーは1887年に書いた論文においても、「金象將軍」が金将になった可能性を指摘している。木村(2001)も、ヒムリーと同様に、金将との類似を指摘しつつも「金象」を「象」の駒とみなしている。なお、ヒムリーは1873年の時点では、角行を「角将」だと誤解していたため、実際以上に将棋には「将」と呼ばれる駒が多いと考えていた。Vgl. Himly 1873: 124, 126f.; Himly 1887: 466; 木村2001: 52; Himly 2019: 64f., 67.
- 29) 同個所につけられた脚注では、3種類の異なる「将」(玉将, 金将, 銀将)だけでなく、2種類の異なる「車」(香車, 飛車)も紹介されている。ヒムリーの目には、将棋では「将」や「車」の駒が数種類あることが、とりわけ特異に映ったようである。
- 30) ヒムリーは、この個所に脚注をつけており、ここでは、香車ではなく、1枚しかない飛車がチェスのルーク(したがって象棋の「車」と同じ動きであることを紹介している。Vgl. Himly 2019: 64.
- 31) Vgl. Himly 1873: 124f.; Himly 1887: 462; 清水2017: 58; Himly 2019: 62f.
- 32) マレーが掲載した「ヒムリーによって再構築された古代象棋」(Murray 1913: 124)では、「六甲」は現行の象棋の「卒」と同様に卒林線(兵行線)、つまりヒムリーの記述にしたがった場合のd列に並んでいる。また、単なる誤記なのかもしれないが、「將軍」あるいは「帥」がクイーンにあたる駒になっており、「上将」がキングになっている。
- 33) なお、ヒムリーは、古代中国には盤の大きさが異なる複数の将棋系ゲームがあったと考えているため、とくにチャトランガの8×8マスから11路の盤に変化した理由については考察していない。しかし、彼は古代中国には将棋の原型となった9×9列(該当個所では「マス」とも「路」とも断定していない)のゲームもあったとみなしており、また象棋の独特な盤については打馬など他の遊戯の影響を指摘しているため、再現図における駒の配置から、彼が以下のように考えていたのではないかと私は推察する。まず、囲碁など交点置きをする古代中国の遊戯の影響から8×8マスの盤を使って交点置きでプレイする9×9列のゲームが生まれ、その後、「炮」の駒が発明され、「宝応象棋」タイプのゲームでは自陣の1列目に2枚追加されたため、2列増やした11路の盤が創られた。なお、将棋だけでなく、現行の象棋もこの9×9列のゲームの発展型であり、界河(と九宮)を設け、「炮」を1列目ではなく「馬」のまえに配置したも
- のと考えても矛盾はない。清水(2017)は、8×8マスの盤から(9路ではなく)9×9マスの盤が生まれ、それが日本に伝わったと考えている。Vgl. Himly 1870a: 110f., 115; Murray 1913: 124; 清水2017: 126f.; Himly 2019: 67.
- 34) フィルズはバルシャのシャトランジの駒で、中世までのチェスにもあった。斜め四方に1マスずつ動く駒で、象棋の「士」にあたる。たとえば、「上将」を2枚と想定してa5とa7に配置したほうが、現行の象棋に近い。1枚しかない駒が「将」の前に置かれる点に関しては、「金象」から中将棋の酔象を連想したのかもしれないが、その場合、「金象」を「象」の駒として扱っていることと矛盾する。なお、ヒムリーは将棋系ゲームの駒に動物名が用いられている例として、酔象などの中将棋の駒に言及している。「王不見王」のルールに関しては、11路の盤でおこなう「宝応象棋」に「卒」が6枚だと「将」の前になにも駒がなく、「将」どうしが直接対面することになるため、このルールに反することをHimly(1873)ですでに指摘している。Vgl. Himly 1873: 125; Himly 2019: 66f.
- 35) ヒムリーは、唐代において界河のない11路の盤が使われていたと確信していたが、それがより小さい10×10マスの盤として使用されていた可能性も捨てていない。「宝応象棋」が10×10マスでプレイされていた場合、「卒」以外の駒(「将」と「士」以外が2枚ずつと考えている)がすべて1列目に並ぶとマス目が埋まってしまうため、現行の象棋と同様に、あとから加わった2枚の「炮」だけは別の列に置かれたのではないかと、とも考えている。3列で構成される陣形という案は、こうした発想から生まれた可能性もある。ただし、現行の象棋も将棋も1列目はすべて駒で埋まっているので、この考えには説得力がないように思われる。Vgl. Himly 1873: 125f.
- 36) 現代の将棋史研究者も「宝応象棋」の再構築を試みている。とりわけ、将棋系ゲーム全体の発展史のなかで駒の動きの変遷を考察した木村(2001)の主張は、興味深い。彼の説によれば、「宝応象棋」では「車」だけでなく「馬」や「象」もより古く弱い動きをしており、それが将棋の香車、桂馬、銀将に引き継がれている。なお、盤に関しては、もっぱら8×8マスのものが想定されている。Vgl. Himly 1870a: 115; Murray 1913: 124f.; 木村2001: 52f.; 清水2017: 58, 120f.; 邢2018: 39.
- 37) 清水2013: 13以下; 清水2017: 39以下, 145以下参照。
- 38) Vgl. Banaschak 2001: 46f.; 清水2017: 17f.
- 39) ヒムリーは、『和漢三才図会』を挙げて、日本における象棋の知名度の低さを以下のように指摘している。「それどころか、前世紀[18世紀]の初めに

- 刊行された日本語による『三才図会』にすら、駒の初期配置が再現されていないし、両陣を分ける河も描かれていない」(Himly 2019: 51) Vgl. Banaschak 2001: 50f.; ヒムリー 2020: 136f.
- 40) なお、『ライブチ絵入り新聞』は19世紀ドイツで商業的に大きな成功を取めた大衆紙で、チェス欄が常設されており、海外の将棋系ゲームに関する記事だけでなく、チェス・プロブレムなどが連載されていた。ランドルフ1971: 117; 増川1996: 198以下; 清水2013: 14以下, 17; 清水2017: 34以下, 129; 細川2017: 120参照。
- 41) Vgl. Linde 1874: 83; Murray 1913: 138.
- 42) なお、空海は804年に唐に到着し806年に帰国しているの、少なくともヒムリーが挙げた年代は正しい。また、ヒムリーが言外に示しているように、その時期にはすでに唐では象棋が小説の題材になるほど広まっていたため、実際に空海がこのゲームを知っていた可能性もある。Vgl. Himly 1877: 155; 寺島編1884.
- 43) ヒムリーは、象棋の「砲」が将棋の飛車および角行に相当すると考えていた。たしかに、古代のゲームに後から追加された強い動きの駒という意味では当たっている。Vgl. Himly 1870a: 111, 115f.; Himly 1873: 126f.
- 44) ヒムリーのいう「飛び石的な伝播」に関しては、清水(2017)は、銀将とコーンは別々に伝わった古い駒の動きがそれぞれの場所に残っているだけとみなしている。なお、この双六系ゲームの伝播過程は、東南アジア伝来説をとる現代の将棋史研究者にも注目されている。Vgl. 清水2016: 244, 256; 清水2017: 134, 203f.; Himly 2019: 55.
- 45) ヒムリーからの情報に基づいて東アジアの将棋系ゲームを論じたLinde(1874)は、幸田露伴も紹介しているように、将棋系ゲームが争いを禁じる仏教徒によって発明されたとみなしている。そして、仏教とともにインド以外の地域に伝播していったとする説を紹介し、その傍証として、(1)6世紀の初めにインドでバラモン教が再興したことで仏教徒がペルシャに逃れたこと、(2)仏陀の最も有名な聖遺物があるセイロンが「インドの伝説」によれば将棋系ゲームの発祥地とされていること、(3)将棋系ゲームに関する「伝説」と縁のあるカナウジを629年から645年にかけて中国の仏教僧、玄奘が訪れていること、(4)「日本の伝承」では9世紀に仏教とともに将棋系ゲームが日本に伝えられたこと、(5)アジアにおいてはとりわけ仏教国で将棋系ゲームがプレイされていることを挙げている。Vgl. Linde 1874: 82f.; 幸田1951: 7f.
- 46) なお、古代国家の扶南はインドや中国と仏教をつうじた交流があった。また、興味深いことに、アンコール時代のカンボジア軍は(水軍をのぞけば)「歩兵・騎兵・象軍・輜重軍の四軍から成る」(石澤2021: 37)とされており、チャトランガで象られた戦車隊をふくむ4部隊ではなく、「宝応象棋」における荷車隊をふくむ編成と共通している。石澤2021: 37, 301参照。
- 47) Vgl. Himly 1885: 12f.; ヒムリー 2020: 140, 142.
- 48) なお、コーンの動きに関しては、厳密には「駒の動き方に関してはシャムのチェスはビルマのものと同様」(Anonym 1864: 266)と述べているだけなので、1863年の記事を参照しなければ銀将と同じ動きだとは分からない。シットウインの駒の動きに関しては、「我々のビショップにあたる「象」は、斜め四方と直進の5方向へ動く」(Anonym 1863: 18)と紹介されている。Vgl. Anonym 1863: 18; Anonym 1864: 266; Linde 1874: 84f.; Himly 1885: 11; Himly 1887: 466; 石澤2013: 68f.; NDB.
- 49) マックルックに関する1864年の記事に関しては、「前回の[シットウインに関する]記事にお書きくださったバンコクのアドルフ・バステリアン博士のご厚意のおかげで」(Anonym 1864: 266)書かれた、と記者が明言している。一方、1879年の記事では、「近ごろ、バンコク在住のあるドイツ人の努力によって、世界中に広まっているこのゲームの一変種[マックルック]に関する我々の知識が増し、それを明確にイメージできるようになった」(Anonym 1879: 299)となっている。こちらの記事に関しては、Murray(1913)は1880年度の『ドイツ・チェス新聞(*Deutsche Schachzeitung*)』に転載されたものを参照しているようなので、情報提供者をヒムリーとみなす理由はそこにあるのかもしれない。しかし、残念ながら、本稿執筆時点ではその記事を確認できていない。Vgl. Anonym 1863: 18; Anonym 1864: 266; Murray 1913: 23.
- 50) 上述したように、ヒムリーは「馬」の動きを将棋系ゲームの最大の共通点とみなしている。Vgl. Himly 1870a: 116; Anonym 1879: 300.
- 51) 清水2013: 16以下; 清水2014: 53; 清水2017: 34参照。
- 52) まず、ファルケナーは、銀将を「両サイドの金の横にあり、左右と後ろを除くすべての方向に1マス動ける」(Falkener 1892: 159)、つぎにシットウインの「象」を「斜め四方に1マスずつ動き、とることはできないが前へ1マス動けるため、違う色のマスに移動することが可能である。したがって、日本の「銀」に似ているが、こちらは前へ1マス動けるだけでなく、とることもできる」(Ebd.: 177)と紹介している。シットウインの「象」はチェスのビショップに相当し、チェスのビショップは常に同じ色のマスを進むため、初期配置で違う色のマスにあるビショップと交換することはできない。

なお、前方の駒がとれないというのは、イギリスの外交官ハイラム・コックス (Hiram Cox, 1760-1799) の報告に基づく誤解であり、実際には銀将とまったく同じ動きである。そのうえで、ファルケナーは、マックルックがインドやビルマ、日本の将棋系ゲームに似ていることを述べている。以下に、将棋と関連する個所を抜粋する。「ビショップは日本のゲームの「金」[「銀」の誤り]の動きをする。すなわち、斜め四方に1マスずつと前へ1マスである。[...] シャムは、海洋国家であり、インドとビルマ、日本から部分的にこのゲームを受け入れたように思われる。シャムは、インドから「舟」という駒名を、ビルマと日本からはビショップの動きを受け入れた。[...] ポーンは、日本のゲームと同様に三列目にある。[...] その一方で、ナイトの駒が馬という意味の「マー」という名前なのは、中国と日本に由来している」(Falkener 1892: 192) Vgl. Murray 1913: 109, 111; Cazaux/Knowlton 2017: 86f.

- 53) Vgl. Murray 1913: 139.
 54) マレーは、たしかに、将棋とマックルックの共通性として、ピアと歩兵、コーンと銀将の類似を挙げている。しかし、コーンと銀将の動きに関しては東南アジア以外にも同様のものがみられることを指摘しているし、また、ピアと歩兵の共通性については「この類似性はおそらく偶然であって、それ以上のものではないだろう」(Murray 1913: 115) としている。さらに、将棋では歩兵以外の駒も成れるのになら、マックルックではピアしか成れないという相違点を挙げるなど、東南アジア伝来説には一貫して否定的である。Vgl. Murray 1913: 59, 114f., 138f.; 清水 2013: 16; 清水 2017: 129f.
 55) Vgl. Linde 1874: 82f.
 56) Vgl. Anonym 1879: 300.
 57) 12×8マスの横長の盤を用いる大型のチェス変種で、現在のビショップと同様に動く「急使 (Kurier)」と呼ばれる駒があることからこう呼ばれている。13世紀初頭には存在していた古いゲームだが、ドイツ中部のシュトレック村で伝統的にプレイされつづけてきた。なお、ヒムリーは“r” 2つの“Kurrierspiel”と書いている。日本語では「クーリエ・シュピール」と書くことが一般的なようだが、ドイツ語での発音は「クリーア・シュピール」に近い。Vgl. Himly 1885: 2; Cazaux/Knowlton 2017: 232f.
 58) その一方で、龍王や龍馬が含まれる中将棋については、(仏教的思想ではなく)動物の名称が駒に使われる例として紹介している。Vgl. Himly 1885: 3f., 11f.; Himly 2019: 66f.
 59) 古作 2014: 141; 清水 2017: 137以下, 143参照。
 60) 現代の将棋のように複雑なゲームは無理だろう

が、〈原将棋〉に持ち駒や成りのルールがなかったとするならば、このように地面と小石だけでもプレイ可能だったかもしれない。大内 1998: 43以下; 清水 2017: 39以下, 145以下; メレンドルフ 2020: 131以下参照。

参考文献

- 石澤良昭 (2013): 『〈新〉古代カンボジア史研究』, 風響社。
 石澤良昭 (2021): 『アンコール王朝興亡史』, NHKBOOKS。
 大内延介 (1998): 『将棋の来た道』, 小学館文庫。
 木村義徳 (2001): 『持駒使用の謎 日本将棋の起源』, 日本将棋連盟。
 幸田露伴 (1951 [1900]): 『将棋雑考』, 蝸牛会編『幸田露伴全集』19, 岩波書店, 1-47ページ。
 古作登 (2014): 『日本の将棋と文化展』図録』, 大阪商業大学アミューズメント産業研究所。
 コルシュルト, オスカー (2018 [1881]): 『碁の理論と実践』(高嶋秀明監, 細川裕史訳), 飯塚書店。
 塩谷賛 (1972): 『露伴と遊び』, 創樹社。
 清水康二 (2013): 『将棋伝来再考』, 榎原考古学研究所『考古学論攷』36, 1-20ページ。
 清水康二 (2014): 『「庶民の遊戯である将棋」考—将棋伝来問題の定説化を目指して—』, 榎原考古学研究所『考古学論攷』37, 47-59ページ。
 清水康二 (2016): 『「雙六の伝来経路に関する再検討」』, 大阪商業大学『アミューズメント産業研究所紀要』18, 243-256ページ。
 清水康二 (2017): 『東アジア盤上遊戯史研究』, 明治大学博士学位請求論文。
 高橋稔 (2018): 『「玄怪録」と「伝奇」 続・古代中国の語り物と説話集—志怪から伝奇へ—』, 東方書店。
 寺島良安編 (1884 [1712]): 『和漢三才図会 上之巻』翻刻版, 中近堂。
 中村千鶴 (2022): 『シャンチー入門とその先へ』, マイナビ出版。
 中村元 (2004): 『古代インド』, 講談社。
 ヒムリー, K. (2020 [1879]): 『日本のチェス』, メレンドルフ/ヒムリー「19世紀のドイツ人がみた東洋のチェス」(細川裕史訳), 『阪南論集 人文・自然科学編』55 (2), 136-142ページ。(= Himly 1879)
 細川裕史 (2017): 『娯楽としての犯罪報道—19世紀中期ドイツにおける新聞の一側面』, 関西大学『独逸文学』61, 115-132ページ。
 細川裕史 (2020): 『訳者解説』, メレンドルフ/ヒムリー「19世紀のドイツ人がみた東洋のチェス」(細川裕史訳), 『阪南論集 人文・自然科学編』55 (2), 142-150ページ。
 ホルツ, ヴィクトル (2019 [1874]): 『日本のチェス—お雇いドイツ人の将棋論』(細川裕史訳), 『阪南論集

- 人文・自然科学編] 54 (2), 111-121 ページ。
- 増川宏一 (1996) : 『将棋の起源』, 平凡社。
- 増川宏一 (2013) : 『将棋の歴史』, 平凡社。
- メレンドルフ, O. v. (2020 [1876]) : 「中国人のチェス・ゲーム」, メレンドルフ/ヒムリー「19世紀のドイツ人がみた東洋のチェス」(細川裕史訳), 『阪南論集 人文・自然科学編』55 (2), 128-136 ページ。
- ランドルフ, アレックス (1971) : 「将棋とチェス (1) 将棋とチェスの歴史の一面」(中島一郎訳), 日本将棋連盟『将棋世界』1971 (3), 116-117 ページ。
- 邢金善 (2018) : 『象棋史話』, 社会科学文献出版社。
- Anonym (1863) : Schach in Birma. In: *Leipziger Illustrirte Zeitung*, 4.7.1863. S. 18.
- Anonym (1864) : Schach in Siam. In: *Leipziger Illustrirte Zeitung*, 16.4.1864. S. 266.
- Anonym (1879) : Das siamesische Schachspiel. In: *Leipziger Illustrirte Zeitung*, 11.10.1879. S. 299-300.
- Banaschak, Peter (2001) : *Schachspiele in Ostasien. Quellen zu ihrer Geschichte und Entwicklung bis 1640*. München.
- Cazaux, Jean-Louis/Knowlton, Rick (2017) : *A World of Chess. Its Development and Variations through Centuries and Civilizations*. Jefferson.
- Corff, Oliver (2019a) : Vorwort und Einleitung. In: Karl Himly: *Die Abteilung der Spiele im "Spiegel der Mandschu-Sprache"*. S. ix-xxxiii.
- Corff, Oliver (2019b) : Bibliographie. In: Karl Himly: *Die Abteilung der Spiele im "Spiegel der Mandschu-Sprache"*. S. 151-162.
- Falkener, Edward (1892) : *Games ancient and oriental and how to play them*. London.
- Himly, Karl (1870a) : The Chinese game of Chess as compared with that practised by Western nations. In: *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society*, 6. S. 105-121.
- Himly, Karl (1870b) : Das Schachspiel der Chinesen. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 24. S. 172-177.
- Himly, Karl (1873) : Streifzüge in das Gebiet der Geschichte des Schachspiels. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 27. S. 121-129.
- Himly, Karl (1877) : Aus einem Briefe des Herrn Kais. Dolmetscher K. Himly an den Herausgeber. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 31. S. 155-156.
- Himly, Karl (1879) : Das japanische Schachspiel. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 33. S. 672-679.
- Himly, Carl [Karl] (1885) : *Schach- und Kurrierspiel - Ströbeck und Morgenland*. Separat-Abdruck aus der Halberstädter Zeitung und Intelligenzblatt. Halberstadt.
- Himly, Karl (1887) : Anmerkungen in Beziehung auf das Schach- und andere Brettspiele. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 41. S. 461-484.
- Himly, Karl (1889) : Morgenländisch oder abendländisch? Forschungen nach gewissen Spielausdrücken. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 43. S. 415-463.
- Himly, Karl (2019) : *Die Abteilung der Spiele im „Spiegel der Mandschu-Sprache“*. Hrsg. v. Oliver Corff. München.
- Irwin, Eyles (1793/94) : An Account of the Game of Chess, as Played by the Chinese, in a Letter from Eyles Irwin, Esq; to the Right Honourable the Earl of Charlemont, President of the Royal Irish Academy. In: *The Transactions of the Royal Irish Academy*, 5. S. 53-63.
- Linde, Antonius v. d. (1874) : *Geschichte und Litteratur des Schachspiels*. Bd.1. Berlin. (=『チェス・ゲームの歴史と文献』)
- Murray, H. J. R. (1913) : *A History of Chess*. London.
- Schlegel, Gustav (1869) : *Chinesische Bräuche und Spiele in Europa*. Breslau.
- Walravens, Hartmut (1984) : Karl Himly - Leben und Werk. In: Karl Himly: *Beiträge zur Geschichte des Schachspiels. Mit einer biobibliographischen Skizze*. Hrsg. v. Hartmut Walravens. Hamburg. S. II-III.
- Neue Deutsche Biographie*: <http://www.ndb.badw-muenchen.de/> (= NDB)

(2022年11月18日掲載決定)